

## 【小さい頃の話】

私ね、十人きょうだいのちょうど真ん中なの。年はね、みんな二つずつ違う。

例えば長男が二十歳だとするでしょ。そうすると次の兄が十八、十六、十四…。全部二つずつ違って、私の下から三番目の妹のとこだけ四つ違ってただけ。あとは全部二つ違い。よく作ったよね。ハッハッハ…。

だからね、親がもう面倒見てくれないのよ。昔の親ってさ、私なんかは子どもが多かったし、なおさらそうなのかもしれないけども、もう自由で。

勉強しなさいとか、こうしなさい！ああしなさい！とかいっさい無かったの。

家にね、一斗缶っていうおやつのある場所があったの。

あの中にいつもおせんべいがいっぱい買ってるんですよ。学校から帰ってくると、子守のを言いつからないようにそーっと裏から入るの。それでポケットにいっぱいのおせんべい詰めて、カバンをそーっと置いてね、裏から遊びに行っちゃーうーそんな感じの子どもで。

小さい頃なんか、親に対して勝気なもんだから口ごたえて、うちの父親が怒ったの。

それで父親が追っかけてきたときに、近くに私たちの遊び場があったんだけど、そこに逃げようと思ってね。でも親の方が足がはやいからつかまって、背中にガーって乗せられて、でうちへ連れてこられて。わんわん泣いたんだけど謝るまで勘弁してもらえなくて。やっぱり謝んなかったから、お灸据えられた。それが忘れられない思い出ね。

小学生の時は学校のすぐそばにお山みたいなのがあって、お昼休みになるとお姫様ごっこをして。みんな役をやりたいわけよ。みんながだれそれのお姫様がいいとか、あたしなんかお母さん役ばかり！お姫様になりたかったんだけどさ。ハッハッハッハ…。

他にも、縄跳びとかいろんなことやったよ。ちょうど銚子のね、飛行場があったから兵隊さんがみんな来てたんですよ。境内で遊んでると、兵隊さんたちが休暇で来て、「一緒に縄跳びの中に入れておくれー！」なんて言われて遊んだり、仲良くなった兵隊さんが飛行場を案内してくれて、飛行場まで遊びに行ったこともあるのよ。

それからその兵隊さんと一緒に、銚子にある君ヶ浜っていう海水浴場に松林がずーっと続いててね、見晴らしがいいのね。その見晴らしのいいところにお弁当をもって、兵隊さんと歌ったり、踊ったり。他にもみんなでお遊戯やったり、縄跳びやったり。

そしてその兵隊さんが終戦になってから、他の人は特攻隊で死んじゃったりしたけど、ひとり残った人がいて。その人が九州の方の人で、その時に会ってた子どもたちに消息を聞きに来た時に、あたしなんかもう、東京にお嫁に来ていたんで、終戦後何年か経ってから会ったりなんかしたこともあるのよ。

## 【戦争のお話】

生まれは千葉県銚子。銚子もさ、三分の二が戦災で焼けちゃった。

その時に私小学校六年生だったんだけど、一歳の子どもをおぶって。母が三歳の子をおぶって、片方右に六歳かいくつかの子の手を引っ張って逃げたときなんか、大変だった。

初めにね、照明弾を落とされると風のように明るくなるでしょ。そうすると、そこに焼夷弾がバツと何十個とこう散らばるのね。その照明弾が落ちて明るくなったところに焼夷弾を落とされて、で、こんど爆弾。爆弾落とされたら、機銃掃射。もうね、怖いも何も。

銚子ってさ、あれがあったんですよ、飛行場が。飛行機がそこを来てたから銚子はね、すごい空襲がけっこうあったのね。そのときにね、父が栃木の烏山っていうところへッテを頼って家を探しに行ってたの。子どもたちこの井井じゃーんといっ風になるか分からなかったから、疎開させようと思って。それで、父がいない中の空襲だったから大変だったのよ。だから、母がどんな気持ちで。

一番上の兄はいなかったんだけども、二番目の姉と弟二人の、その三人が空襲でうちについてた火を消そうと思っていただけでも、母親が「うちなんかもいいから放っばいてあんたたち逃げなさい！」って。

もう逃げるときに、うちの離れたところにある貸家に父の親がおばさんと二人で住んでたんで、そこに行くつもりだったけども、もうね行くどころじゃないの。火の海になっちゃっているから。それで、よそのうちの防空壕に入れさせてもらって。でも入ってるうちに、私の弟がいなくなっちゃってさ。名前を呼んだら、向こうの別の入り口で「おー！」って返事来て、いたー！と思って。

けども、最後にはその防空壕に火の粉が入ってきちゃって、中の布団やなんか火が移っちゃうんですよ。ここにいたんじゃ焼け死んじゃうからみんなそこから出て、空襲が少し収まってきたんでおばあちゃんのうちに逃げようと思って。そして、おばあちゃんのうちへ行く途中にある橋が、焼け落ちたらもう向こうへ行かれないと。こっち側にいる人はみんな死んじゃうよー！と言われて、橋までみんな走って逃げたの。

そしたらその橋の上で、うちに残ってた姉、おばあちゃんを探しに行ったけどあたしたちがいないので、よその防空壕を探しに行っていた姉と橋の方で偶然会ったんだよね。橋の上で親子抱き合って泣いたのよ。「生きびたー！」「うーん」。

私の二つ上の兄は、あたしたちとは別に逃げたの。そしたら、機銃掃射で隣の人が打たれて死んでたけど、「おれ助かったんだよー運が良かった。」って。だからね、けっこう空襲で怖い思いしてるんですよ。

## 【人生のお話】

人ってさ、同等だと言いながらちよっと変な感じの人がいると、馬鹿にしたりするところなんかがあるけども、本当にさ、人間って同等だよな。付き合いたくないうちにおしゃべりしない相手の人を「あの人なんか嫌だな。」と思っても、お付き合いしてみるとすごく良い人だったりするからさ、だから人を見下してはいけない。絶対に人を見下してはいけないってことを伝えたい。

人生良い時もあれば、悪い時もある。だから、死んでいくときに、プラスマイナス、まあまあ良かったかなって思える人生だったらいいんじゃないかな？って思う。

令和六年八月

